

ーシンポジウム発表者レジュメー

## 『ベンヤミンの社会哲学？』

三崎和志(岐阜大学地域科学部准教授)

今回のシンポジウム報告では、ヴァルター・ベンヤミンの思想の社会哲学的な意義について、自身の研究してきた時代を振り返りつつ考察し、議論の糸口のひとつを提供させていただきたい。

ベンヤミンの思想に社会哲学をみることはそう突飛なことではない。学生時代の青年運動関係の文章、映画、写真などのメディア論、未完の『パサージュ』プロジェクトなど、ベンヤミンに社会哲学的な意義を見いだせるテキストは確実に存在する。

標題の疑問符は、むしろ報告者の個人的な感慨に依る。

ベンヤミンに向かうことになった 80 年代当時、(少なくとも報告者周囲の) 社会哲学のメインストリームはヘーゲル/マルクスであった。それにウェーバーも含めてよいだろう。乱暴にまとめれば、それ

らは社会の歴史動的、構造的把握、ある種のグランドセオリーであった。

フランクフルト学派にもグランドセオリーへの志向はある。初期のホルクハイマーでは、社会哲学は実証主義的な社会研究への対抗概念であり、たんなる現実の記述ではなくその批判、社会の革新の方向性を示唆しうる点に社会哲学の意義が見出されている。その際、彼が念頭に置いていた社会哲学の枠組みはマルクスのそれであり、ホルクハイマーの社会哲学はそれに精神分析の接合し、イデオロギー批判を精緻化する試みだったといえる。ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』（1981）は、そういった総括的社会把握の新機軸であった。

80年代、時代は《ポストモダン》の流行下、グランドセオリーの失効が唱えられる。その中で、ベンヤミンはその先駆者的な意義を見出され、グランドセオリーに代わる《何か》を示す存在として注目を集めるようになる。しかし当時の議論の中で、その《何か》にくっきりとした像が与えられることは、ついぞなかったように思う。

世紀があらたまって以後、グローバリズムの拡大、新自由主義の勢力伸長の中、グランドセオリーは復権し、その視座の重要性がふたたび承認を得るようになったのが現在だといえる。デヴィッド・ハーヴェイの仕事はその代表的なものだ。

以上のような流れを踏まえたうえで、あらためてベンヤミンの思想がもつポテンシャルティーグランドセオリーとかならずしも対立するわけではないが、グランドセオリーが持たない《何か》について考えたい。

絶筆『歴史の概念について』で、歴史主義や社会民主主義者の進歩史観が批判の対象とされていることは周知のとおりだ。ではそういった歴史把握に代わる歴史とはどのようなものか？ベンヤミンはグランドセオリー的なそれとはことなる歴史への視座をたしかに有している。それをエッセイ『物語作者』における物語論、記憶論との関連で再構成し、その歴史構想がもつ社会哲学的含意について考察する。

#### 論者略歴

三崎和志（みさきかずし）一橋大学博士課程単位取得退学（1999年）。都留文科大学、法政大学他非常勤講師を経て、2008年より岐阜大学地域科学部准教授。ベンヤミン、アドルノをはじめとするフランクフルト学派の思想がおもな研究対象。論文：「《いたみ》の思想—《ポスト形而上学》の時代の唯物論」（古茂田、中西、鈴木編『哲学から未来を拓く① 21世紀の透視図—今日的変容の根源から』青木書店）、「正義・痛み・連帯—ハーバーマス、アドルノにおける《正義の他者》」（日本哲学会編『哲学』No. 60）、「ベンヤミンにおける《崇高》」（都留文科大学研究紀要第55集）他。